

長野川下流の弥生～古墳時代の遺跡と遺物

－東地区の遺跡と博物館収蔵資料から－

岡部裕俊(伊都国歴史博物館)

I はじめに

糸島市の中央部を流れる長野川は、脊振山系の一峰、羽金山を源とし、玄界灘に注ぎ込む総延長11.4kmの河川である。川の名は、「倭名類聚抄」に登場する怡土七郷のひとつ「名加乃郷(ながのこう)」に由来し、中流に鎮座する宇美八幡宮、雉琴神社は神功皇后伝説に由来する神社で、一帯の豊かな歴史を感じさせる。

流域ではこれまで縄文時代～中世・戦国期にかけての埋蔵文化財が各所で確認されている。とりわけ、昭和55～平成元年度にかけて下流域の広範囲にわたって実施された県営圃場整備では、未知の遺跡が多く発見され教育委員会によって発掘調査が行なわれた。

しかし、昭和60～昭和62年度に実施した東地区の調査成果の多くは未報告のままとなっており、長野川流域の歴史を解明する上での障壁となっている。

一方、出土品の中には学術上貴重な資料もあり、その一部はすでに博物館で展示し、要請に応じて他館の企画展に出品することもあり、資料の評価を定めるために調査地点の概要だけでも明らかにしておく必要があると考える。

そこで、本稿では東地区の弥生～古墳時代の遺跡を概観するとともに、すでに館内で展示している資料を紹介する。併せて周辺の、既報告の遺跡や出土資料も紹介し、長野川流域の弥生～古墳時代の地域様相を探る上での一助としたい。

II 地理的環境と遺跡の調査経過

現在の長野川は、河口付近で多久川、雷山川と合流して流れを北から西に変え船越湾に注ぎ込む。これは江戸時代の干拓に併せて流路の改修が行われたため、この河口の一帯は、古代においては深く入り込んだ内海の真ただ中であつた。

弥生～古墳時代の長野川の河口は宮地岳の南西裾、現在のJR加布里駅周辺であつたと考えられており、史跡釜塚古墳は、ちょうど当時の海岸線近くの微高地上に築かれていたことになる。

東地区は、長野川の下流、釜塚古墳から1kmほど溯上した宮地岳の南裾の平野部を中心とする一帯をさし、その範囲は東西2.5km、南北1.5kmに及ぶ。

川の東西には標高10～30mほどのなだらかな低丘陵が広く展開するが、丘陵上には遺跡の数は少なく、まばらに古墳が分布する程度である。

弥生時代から古墳時代の集落遺跡は川の両岸に形成された段丘斜面上に分布している。とりわけ川の左岸に多い傾向がみられるが、これは右岸に比べて左岸に段丘が発達したこと、肥沃な土地が多いことなどに起因するのかもしれない。

東地区の調査は、昭和60年10月～61年3月と昭和62年11月～63年2月期に集中して行われた。いずれの年度も県営圃場整備の追加事業として秋～翌春にかけて事業規模が大幅に拡大され、遺跡の分布が集中する段丘斜面が事業対象地とされたことも、調査面積の拡大に追い打ちをかけ、短期間での広範囲な調査を余儀なくされた。

以下で、未報告の東遺跡、東五反田遺跡、東若宮遺跡の概要と博物館収蔵資料を紹介する。

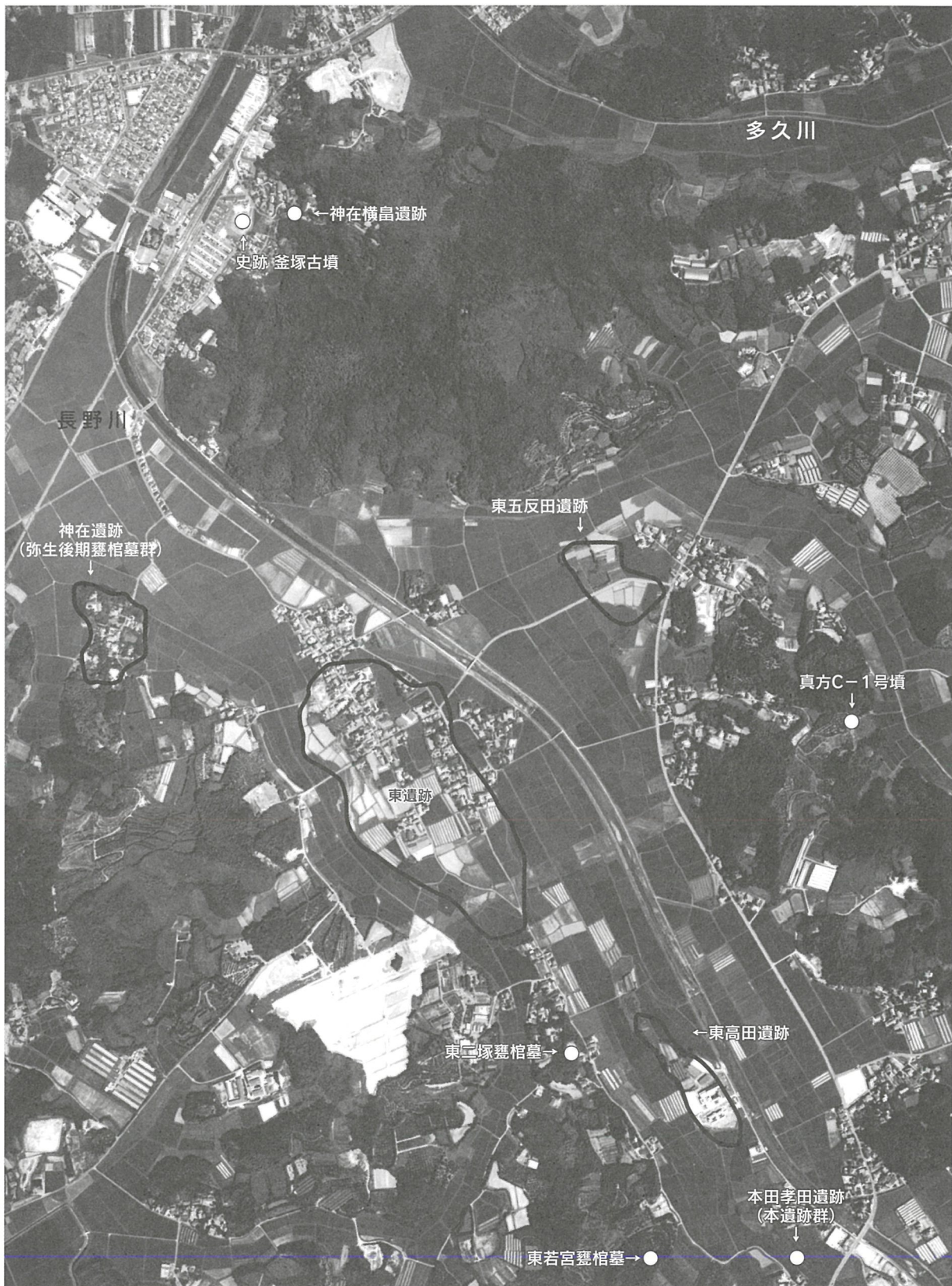
III 東地区における調査の概要

1. 東(ひがし)遺跡

東遺跡は長野川左岸の標高15～20mの微高地上に展開する弥生時代～戦国時代の集落遺跡である。縄文時代の石鏃、石刃なども出土しているが、遺構は確認できていないことから、近隣に当該時代の集落があつたものと考えられる。

ちなみに、釜塚古墳の周囲からも縄文時代前期、晩期の土器や石器が出土している。こちらでも明確な遺構は確認できていないが、縄文集落の候補地の一つである。

調査地は8地点に及ぶが、小字では太田地区、下田地区の2地区にまたがっている。さらに未調査の北側にも拡大する可能性がある。弥生時代～古墳時代の遺構は、太田第1、4、下田第1、2、4地点など主に段丘の西斜面を中心に南北450m、東



第8図 長野川下流域の航空写真(昭和58年撮影 1/10,000)

西300mの範囲に弧状に細長く展開している。

(1) 太田地区 (第9図)

第2地点では弥生中期～後期の円形住居1棟分の柱穴列を確認した。

第3地点では弥生時代後期前葉の環状に配列される甕館墓4基と木棺墓1基を調査した。祭祀土壙が墓群の中心に位置する。1号甕棺は2個の大型広口壺の口縁を打ち欠いたものを使用している。器表の劣化が著しいが胴上半部に赤色顔料が塗布されていたことが確認され丹塗土器であることがわかった。2～4号甕棺は甕や広口壺を転用した単棺の小児棺である。木棺も棺全長が1mほどで小児用と推定される。

また、南に隣接する第1地点の調査では西向きの斜面で古墳時代前期の竪穴住居1棟が確認されているが、下田地区で確認された当該期の集落に連なる遺構と考えられる。

(2) 下田地区 (第9図, 第10図)

太田地区の北に位置する。4地点の調査を行ったが、このうち弥生～古墳時代の遺構が確認されたのは第1, 2, 4地点である。

第1地点から第2地点にかけて弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴住居34棟、掘立柱建物2棟、甕館墓2基などを確認した。

第1地点では弥生時代後期の竪穴住居を5棟、掘立柱建物1棟、古墳時代の竪穴住居4棟などを調査した。住居群最古の住居は6号住居でプランは円形。弥生後期初頭と考えられる。

古墳時代の住居のうち1号住居は正方形プランの住居で、三本の支柱穴が住居の南側のみに並ぶ特異な構造をもち、床面下の長楕円形小土壙から水鳥形土製品が出土した。9号住居では北半部が断面が浅いU字形に掘りくぼめられていた。埋土から古式の須恵器甕片と鍛冶滓が出土しており、当該期の鉄加工工房の可能性があり、注目される。

第2地点は、南北に長い調査区となった。遺構は調査区の西斜面側で遺構の分布密度が高い傾向がうかがえた。弥生時代後期の竪穴住居が13棟、掘立柱建物が1棟、古墳時代前期の小児甕棺2基、古墳時代前期～中期の住居も10棟確認された。

このうち、12号住居内からは多量の古式土師器とともに、縄文タタキの陶質土器が出土している。

第4地点では、弥生時代後期の竪穴住居を4棟確認した。いずれの住居からも石錘が出土している。集落のなかでも当時の海岸線に近い北部に位

置していることから漁労に深くかかわったグループであったことをうかがわせる。

(3) 博物館収蔵資料

水鳥形土製品 (第11図)

水鳥形土製品は、1号住居南東角の床下に掘られた長細い小土壙内で横倒しの状態で出土した。完形で、高さ10.0cm、長さ11.6cm、幅6.0cmを測る。

ふっくらとした胴部から頸をもたげ、頭頂部には低い鶏冠をつける。くちばしはやや大きめで、先端に向かってやや下垂気味である。両眼とも眼を丸く、線描している。尾部は水平方向に短く開いている。また、胴部中央下に円錐形の脚部がつけられている。

胴部は中空で背中には垂直に立ち上がる口頸部を設ける。また、胸には円孔をあけている。

酒器など祭祀で用いる特殊容器として製作されたものと考えられるが、小形で手づくね仕上げの粗い仕上がり具合であることから、実用品としての使用には疑問符がつく。

ずんぐりとした胴体、大きく造りだされた嘴、短い鶏冠などからはオシドリ、カモといった水鳥が連想される。

この土製品が製作時期について、共伴の土器(第10図)から古墳時代前期後半(4世紀後半)と推定している。長野川河口の横畠遺跡や釜塚遺跡では三韓式瓦質土器や伽耶系の陶質土器が出土しており、一帯で広く朝鮮半島との交流が展開されていたものと考えられる。

当時、伽耶地域では、水鳥の形を模した水差しが多く出土していることが知られ、その多くはカモなどの水鳥である。

韓半島の水鳥形土器と比較すると、基本形態は韓半島のそれによく似ており、この影響のもとに当地で製作されたと考えるのが妥当であろう。

陶質土器 (第12図)

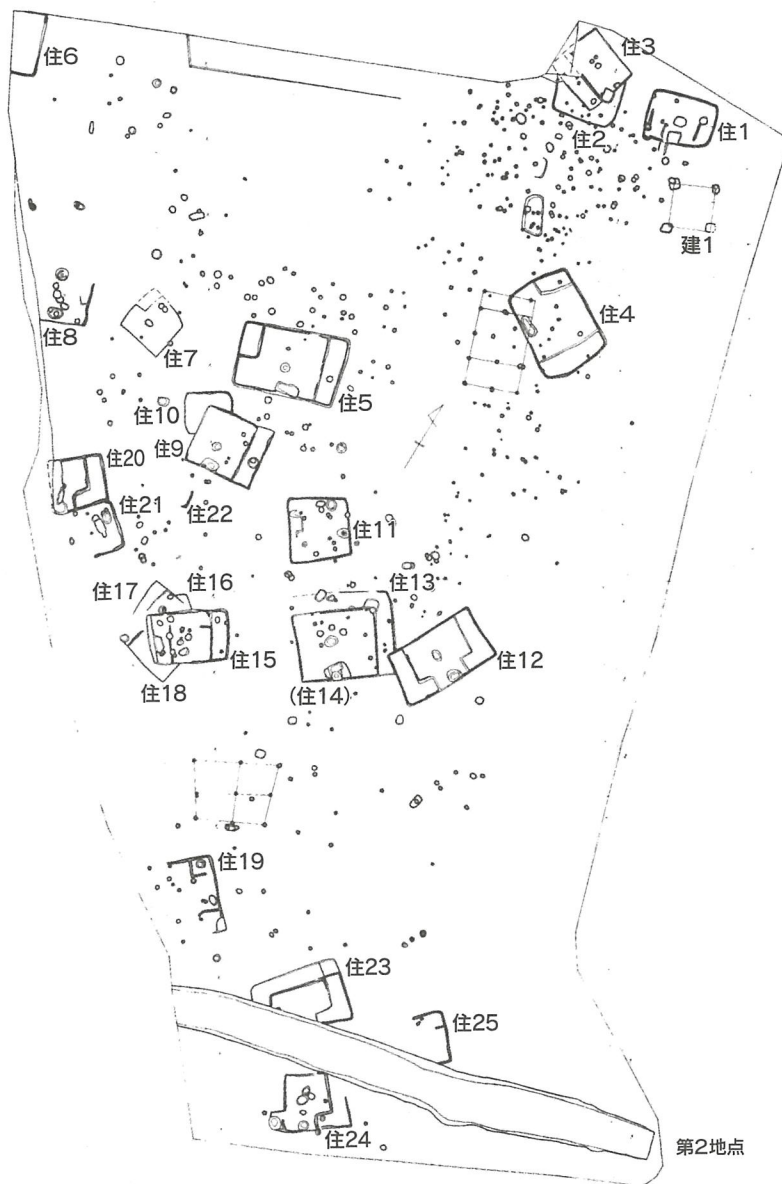
下田地区第2地点南部で検出した12号住居から出土した。

この住居は南北の住居の両小口側にベッド状遺構を付設したもので、住居内に大量の土師器が投棄されていた。陶質土器もそれらに混じって破砕された状態で出土している。復元すると、不足部は多いものの、全形を知ることができる。

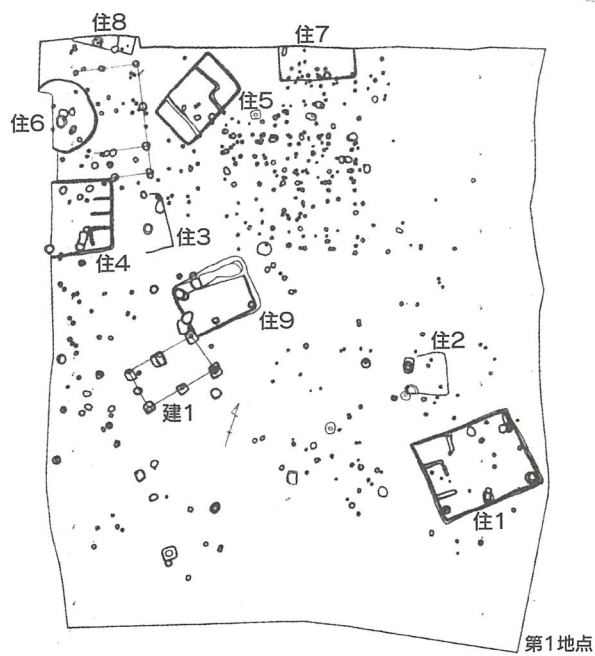
焼成時のひずみが著しいため口縁部は大きく波打つが、概ね高さ28.8cm、口縁径19.6cm、胴部最大径は31.2cmを測る。



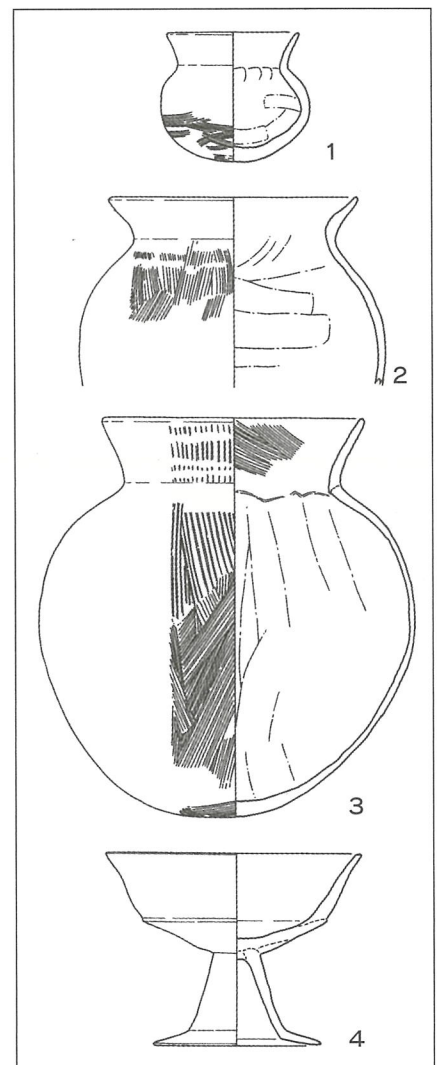
第9図 東遺跡調査地点位置図(1/2,500, 地形は昭和60年当時)



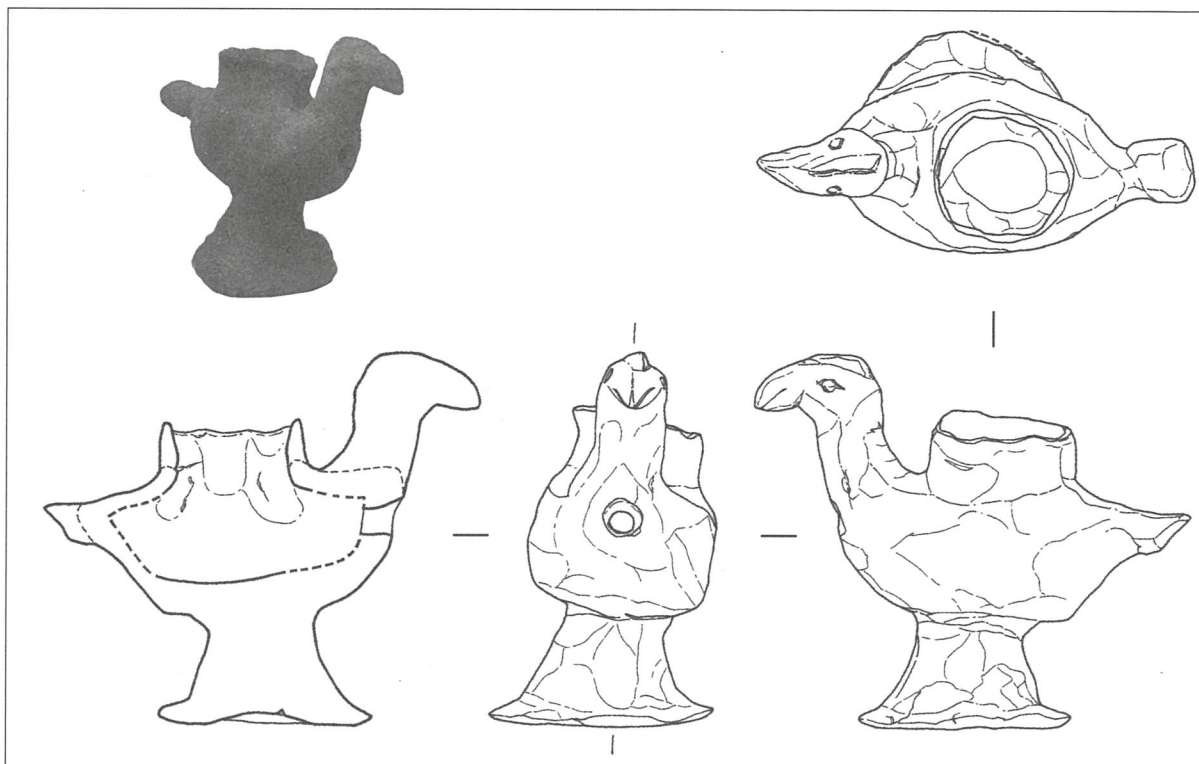
第4地点



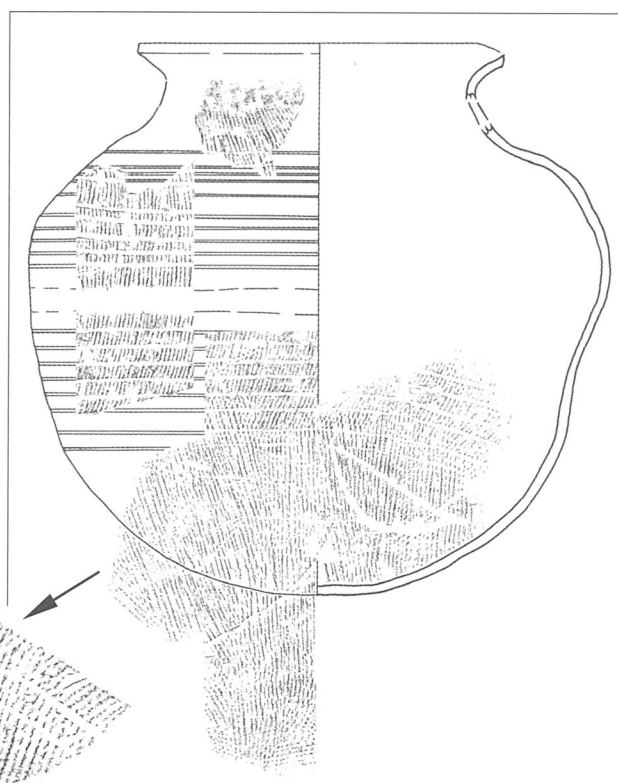
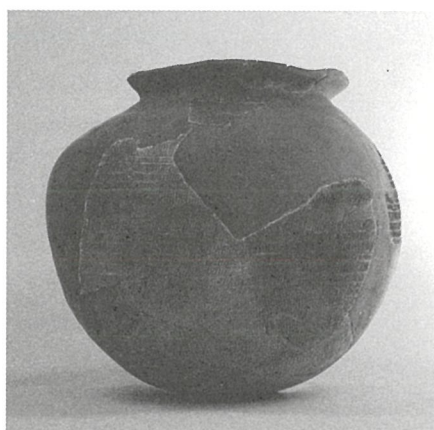
第1地点



第10図 下田地区 第1,2,4地点の遺構配置図(1/500)と
第1地点1号住居出土土器(1/4)



第11図 下田地区第1地点1号住居出土水鳥形土製品(1/2)



船と波状の記号文の拡大(1/2)

第12図 東遺跡下田地区第2地点12号住居出土陶質土器(1/4)

外面は、細かな縄蓆文叩きが残り、肩部から胴中位にかけて15条の沈線がめぐる。

この土器で最も特徴的なことは胴中位のやや下方にへら状工具で三日月状の記号を描き、さらにその下方には細線で波状の沈線を描き足しているところにある。あたかも波間に漂う舟を表現しているように見える。内面は当て具の痕跡をナデ消している。

2. 東五反田(ひがしごただ)遺跡

(1) 遺跡の概要

長野川の右岸に位置する集落遺跡である。長野川に突き出た微高地上にあり、東地区では唯一川

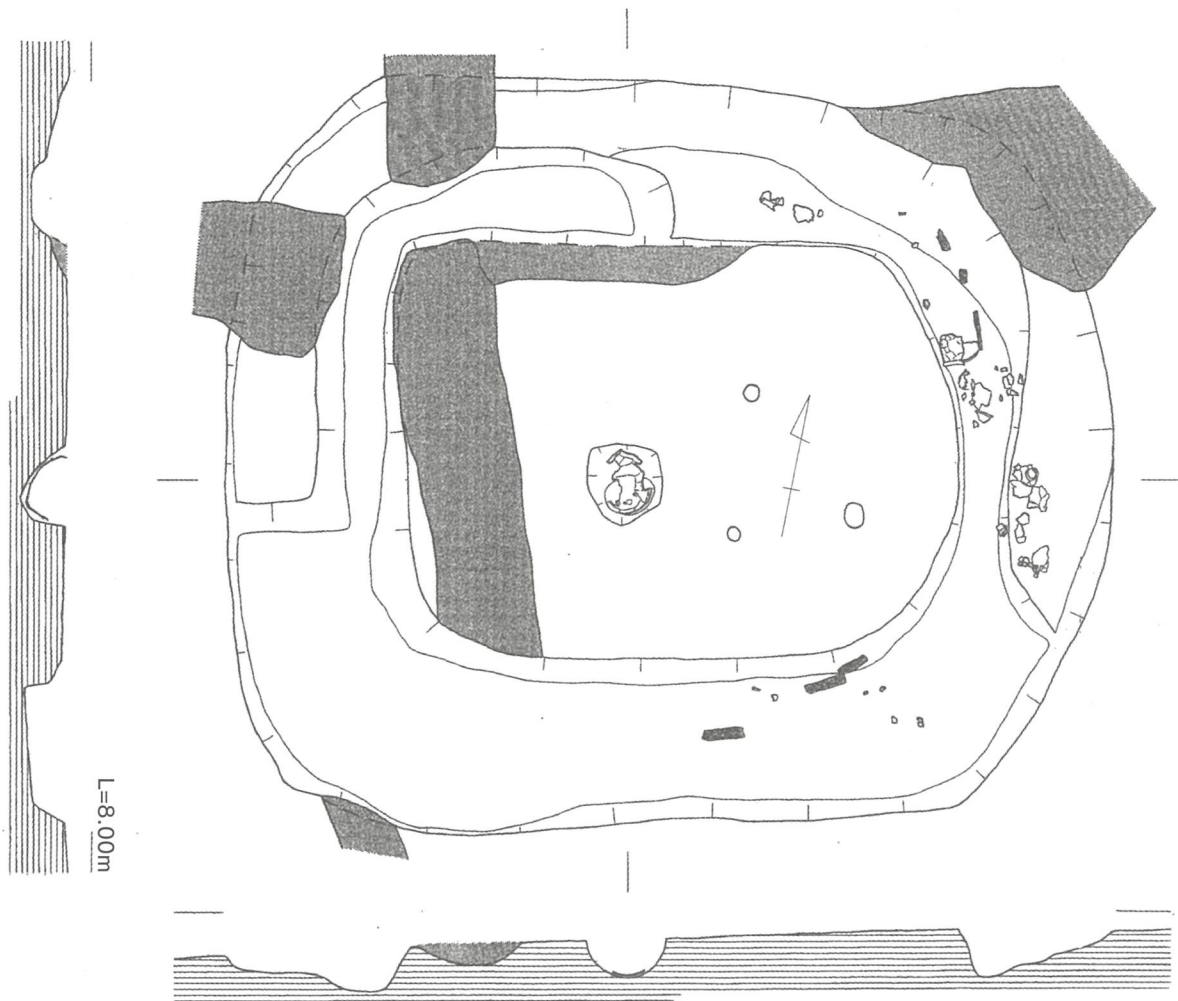
の右岸に営まれた集落である。遺跡を南北に分断する市道を挟んで南区を昭和60年度に南半部を、昭和62年度北半部を調査した。

弥生時代の集落遺構は東西×南北とも100mの範囲内に分布し、弥生時代後期の竪穴住居19棟、終末期の方形周溝墓と古墳時代前期の箱式石棺墓(8号住居内)が各1基が確認されている。

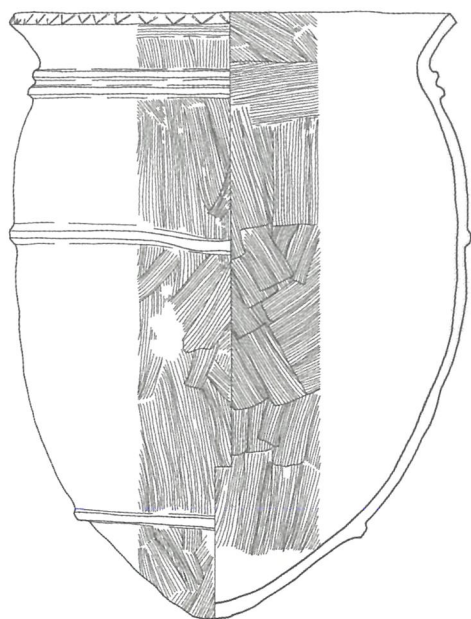
方形周溝墓は集落の北端で検出した。N-12°-Wに主軸をもつ単棺の大型甕棺の周囲に幅1.6～2.2m 深さ40～60cmの周溝がめぐる。周溝は外周から内向きになだらかに傾斜するが、内側の方形区画に向っては急勾配に立ち上がり、断面は「レ」字状となっていた。内区の掘りの規模は東西



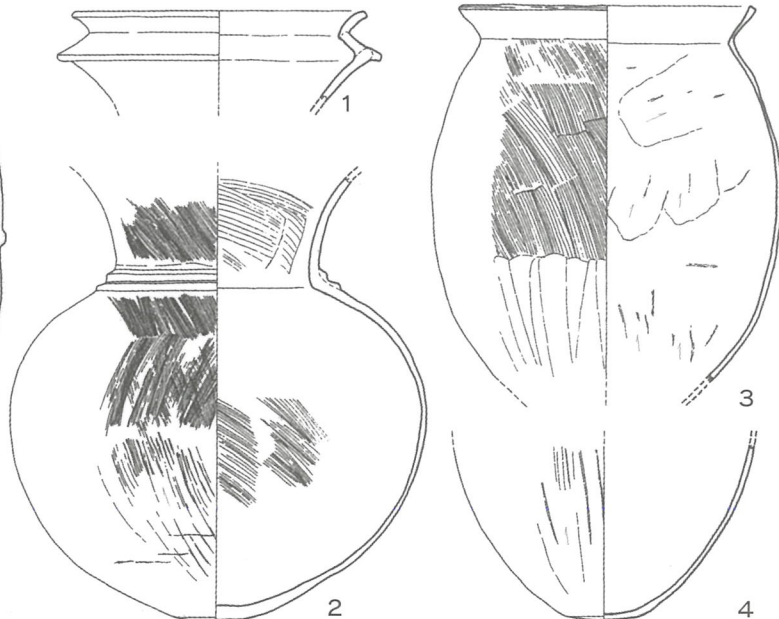
第13図 東五反田遺跡第3地点弥生時代遺構配置略図(1/500)



第14図 東五反田遺跡方形周溝墓実測図(1/80)



第15図 方形周溝墓主体部甕棺実測図(1/10)



第16図 方形周溝墓周溝出土土器実測図(1/6)

5.72m、南北4.24m、周溝を含めると東西9.15m、南北7.56mになる。甕棺内から刀子状の鉄片が出土している。

甕棺及び周溝出土の土器から、弥生時代終末に築かれたものと推定する。

(2) 博物館収蔵資料

方形周溝墓出土土器(第15,16図)

第15図は、大型甕棺で、外形は肩がやや張った砲弾形をしている。高さは80.4cm、口縁径57.0cm、胴径59.7cm。胴部に五条の突帯がめぐる。内外面とも粗い縦ハケで仕上げる。底部の尖底化が進んでいる。

第16図は、周溝から出土した土器である。1は、複合口縁壺の口頸部。擬口縁から内傾した後、口唇部に向かって再び大きく外反する。2は、広口壺ないしは複合口縁壺の胴部で、底部の丸底化が進んでいる。3と4は甕で、いずれも器壁は内面からケズリによって薄く仕上げられ、4では、2と同様に底部の丸底化が進んだ状況を見ることができる。

3. 東若宮(ひがしわかみや)遺跡

(1) 遺跡の概要(第17図)

東二塚甕棺墓の南200mにある東にせり出した舌状の丘陵先端で造成工事のさなかに、甕棺墓が発見された古墳時代前期の合口甕棺墓である。周囲では他に甕棺等は発見されなかったため、単独で埋葬されたものと考えられる。

棺の埋葬角度は 度ほど。下棺は口縁部を打ち欠き、上棺が下棺の口縁を包み込むように被せられていた。棺内の埋土から上下の甕棺とは別個体の複合口縁の大型甕(図18-3)の破片が出土している。

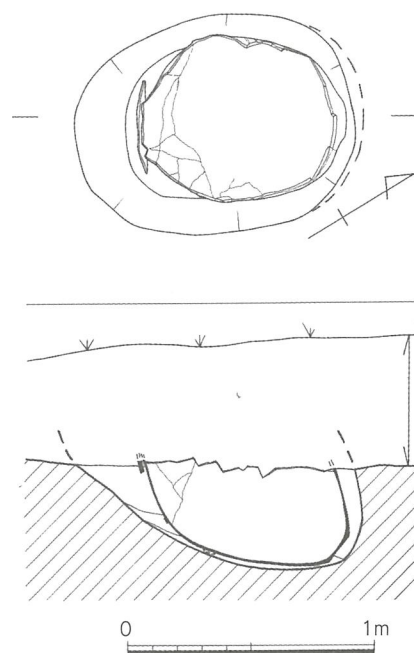
(2) 博物館収蔵資料

甕棺(第18図)

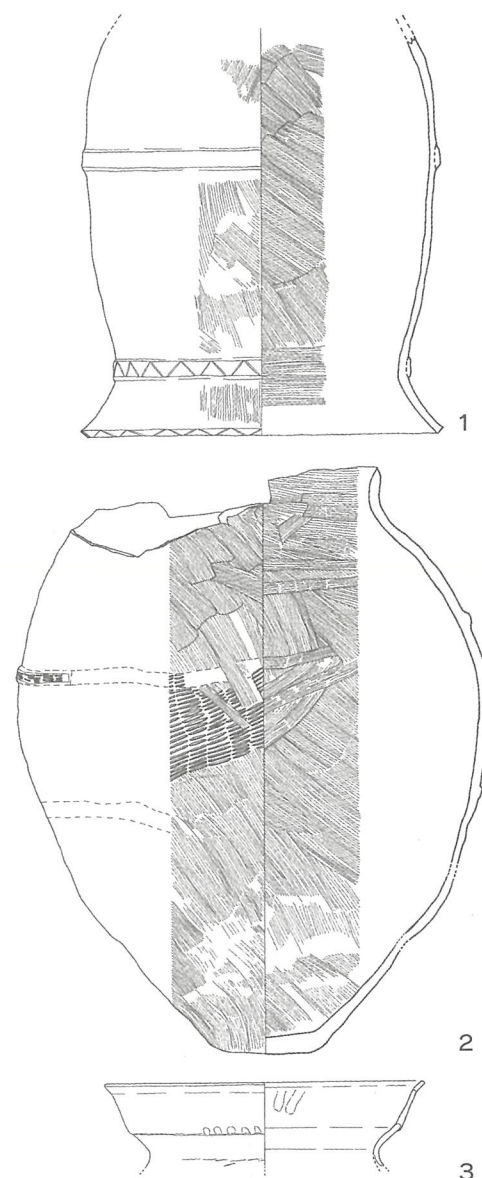
3個体分の土器があり、1、2は墓壙内で確認したもの、3は棺内に崩落した状況で出土したものである。

1は上棺である。最大径は胴中下位にあり、口縁端部とくびれ部の突帯に連続鋸歯文の刻み目を施す。残存高63cm、口縁径55.2cm、胴部最大径54.6cmを計る。

2は下棺である。外形は卵型で胴上半部は緩やかに弧を描きながらすぼまり、口縁部は如意状に外反するが端部は打ち欠き切除されている。高さは93.6cm、胴部最大径75cmを計る。



第17図 東若宮遺跡出土甕棺墓実測図(1/30)



第18図 東若宮遺跡出土土器実測図(1/10)

胴部外面中ほどには縦ハケの後にタタキが施される。また、棺内には赤色顔料が塗布された痕跡が残っていた。

3は、二重口縁の甕の口縁片である。口縁端部に向けて大きく外反する。復元口縁径は50.2cm。2とは別個体であることから、墓壇内に一緒に埋められていたものと推定される。土器の合わせ口付近を目張りとして利用されたのかもしれない。

IV. 東地区および周辺の既知の遺跡

1. 東高田(ひがしたこうだ)遺跡

長野川の西岸、東遺跡の南500mの独立した微高地上に位置する集落遺跡でその範囲は南北長200m、東西幅100mほどと指定される。遺跡の中心地区は昭和50年代に開発が行われ、発掘調査が行われなかったため、その詳細は不明であるが、農作業の折には多くの土器などが出土しており、旧地権者が採集された弥生後期の脚付甕を実見した。また、微高地西側の低地を試掘したところ弥生時代後期の土器包含層を確認した。さらに段丘南端部の発掘調査では古墳前期の土壇などが発見されており、微高地上に集落があったことは確実である。

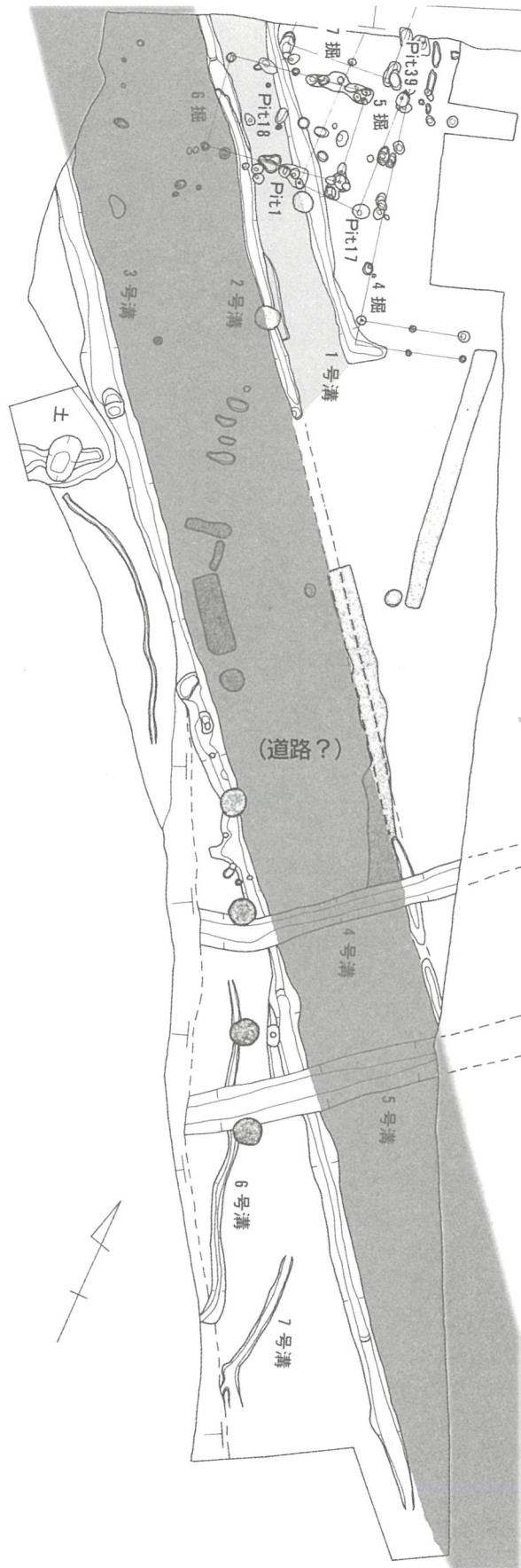
昭和63年に実施した北端部の発掘調査で弥生時代後期の3条の溝を確認した。溝は平行して60mほど続きさらに北に向かって延びていた。3号溝は幅は95cmほどで断面逆台形である。弥生後期前半の複合口縁壺、甕などが出土している。

ちなみに、この北西150mに位置する東ス町遺跡でも3条の溝が確認されている。この2か所の溝群は同一直線状に並ぶ位置関係にある。これらが本来、連続する一連の溝であれば、東遺跡と東高田遺跡をつなぐ道路の側溝であった可能性も想起され興味深い。

2. 東二塚(ひがしふたづか)甕棺墓

東地区を見下ろす二塚地区の丘陵上で、太平洋戦争中の宅地の拡張作業中に偶然発見された。合口の大型甕棺墓で、棺は下棺を西に配し、主軸を東西に向けて発見されたという。

出土品のうち甕棺の下甕と出土した副葬品が東京国立博物館に保管されている。下棺は砲弾形を呈し、底部は平底である。二条を一对とする突帯が胴部中央下に二対、口縁下のくびれ部に一对めぐっている。東五反田遺跡出土品に似ているが、底



第19図 東高田遺跡第3地点の遺構配置図(1/250)

部の平底がしっかりと残っていることや、胴部の突帯がしっかりと作られていることから、東五反田甕棺に先行するものである。

棺底には大量の水銀朱が副葬されていたとみられ、棺内から出土したガラス釧、ガラス丸玉、ガラス管玉の表面にも水銀朱が付着している。

ガラス装身具の表面は風化し白墨化しているが未風化部分では本来の濃緑色を観察することができる。

ガラス製品は、化学分析の結果、いずれも鉛ガラス製であることが判明している。国内では希少なものとされ、藤田等氏は中国からの舶載ガラスを北部九州で再加工した可能性、さらには断面D型をなす特徴などから楽浪系銅釧の影響の下に製作されたものと推定している。

東二塚甕棺墓は、長野川流域の平野部を一望できる絶好の丘陵上に立地し、流域における拠点集落である本遺跡群、東遺跡の両集落の中間地点でもあることや、水銀朱、ガラス釧をはじめとする豊富な装身具類を副葬していることなどから、被葬者は一集落にとどまらず長野川水系流域一帯を広範囲に掌握した首長と推定される。

3. 本(ほん)遺跡群

東高田遺跡の南にある段丘上に位置する集落遺跡である。現在の集落と遺跡の範囲が重複しており本格的な調査は行われていないため、その詳細はわからないが、概ね遺跡は径200mほどの範囲に広がるものと推定され、その中心は現在の白糸酒造一帯と考えられる。

遺跡の北端にあたる本田孝田遺跡では、1989年に行った発掘調査で古墳時代初頭の2基の小児用甕棺墓からガラス小玉が出土し、また、隣接する土器溜りの調査では青銅製鋤先や漆塗りの韓半島系容器蓋が出土している。

小児棺にも副葬品が納められる状況は、同期の甕棺墓で副葬品を有するものがなかった東地区の遺跡とは対照的である。小児棺に副葬品が納められた例は、井原ヤリミゾ遺跡の後期前半の墓群でも認められ、有力集落における階層分化の進行を示す現象ととらえられるが、伊都国内では終末になるとこの現象が拠点以外の有力集落にも波及したことをうかがわせる。

なお、ガラス小玉は径2cmほどの環状に綴られており、ガラス小玉の使用法を考える上でも興味深い。

4. 神在(かみあり)遺跡

東遺跡の北500mに位置し、長野川の氾濫原に突き出た微高地上に営まれた弥生後期後半の墳墓群で、ここからは長野川の旧河口をのぞむこともできる。

この遺跡から出土した甕棺について、原田大六氏が後期後半の甕棺の指標とし、その後も大神邦博氏や橋口達也氏が詳細な比較検討を行った学史的にも重要な遺跡である。

正式な発掘調査は行われておらず、発掘の経緯を記した記録も残っていないため、遺跡の詳細が明らかでないのが惜しまれるが、地元の聞き取り調査などを行い、遺跡に関する情報の収集が必要であろう。

なお、近隣には当該期の集落遺跡は確認されていないことから、少し離れているものの、墓群の主体は東遺跡であったものと考えられる。

出土した甕棺は、糸島高校附属郷土博物館に保管されている。

5. 神在横畠(かみありよこばたけ)遺跡・釜塚(かまつか)遺跡

旧長野川河口右岸の宮地岳裾の谷間に位置する縄文時代～奈良時代の集落遺跡である。集落の詳細は明らかではないが、1996年の発掘調査で弥生中期～後期の土器とともに韓半島瓦質土器が出土した。

2001年には、釜塚古墳の周堤下で発見された土壙から瀬戸内海系の弥生土器なども出土していることから、海を介した対外交渉に関わった海浜集落と推定される。

6. 本林崎古墳

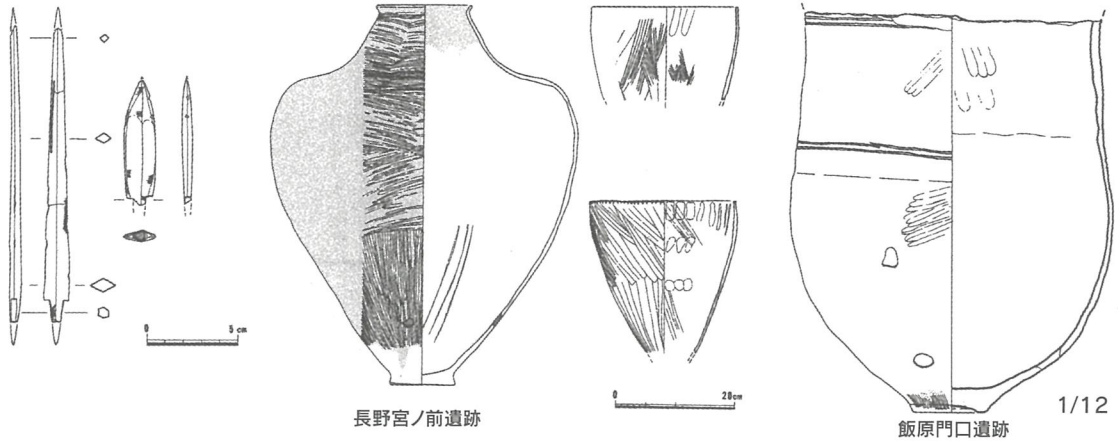
本遺跡群と、長野川を挟んで右岸に対峙する推定全長25mの前期の小型前方後円墳である。発掘調査は行われていないが、墳丘裾の箱式石棺から舶載内行花文鏡の破鏡(糸島高校附属郷土博物館蔵)が副葬されていた。長野川流域最古の前方後円墳と考えられる。

7. 真方C-1号墳

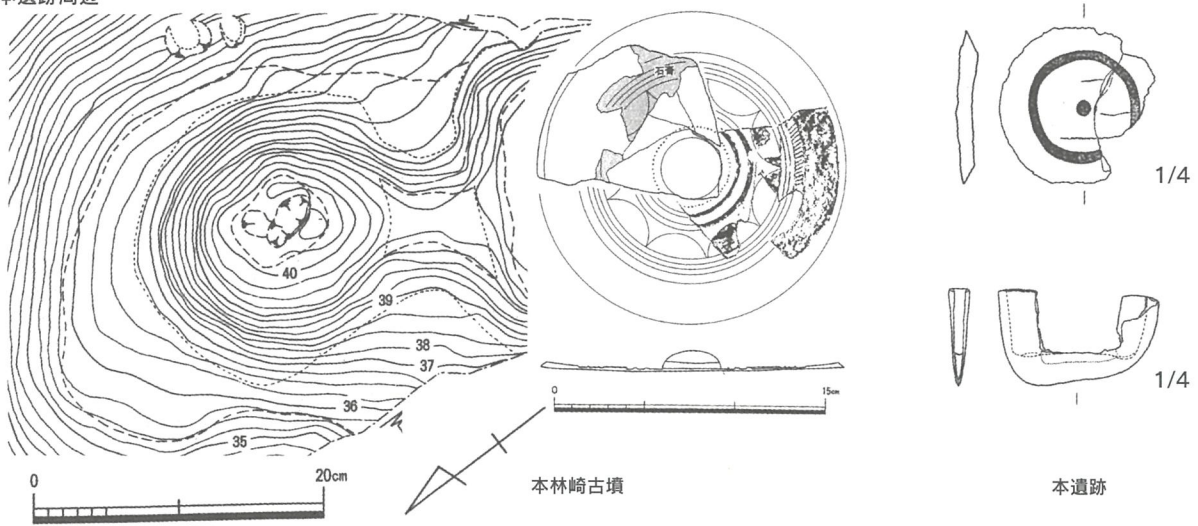
東遺跡群の東に長野川と対峙して立地する丘陵の頂に築かれた小型の古墳で、尾根線には数基の低墳丘の古墳が連なる。

調査時は円墳と考えられていたが調査区外に

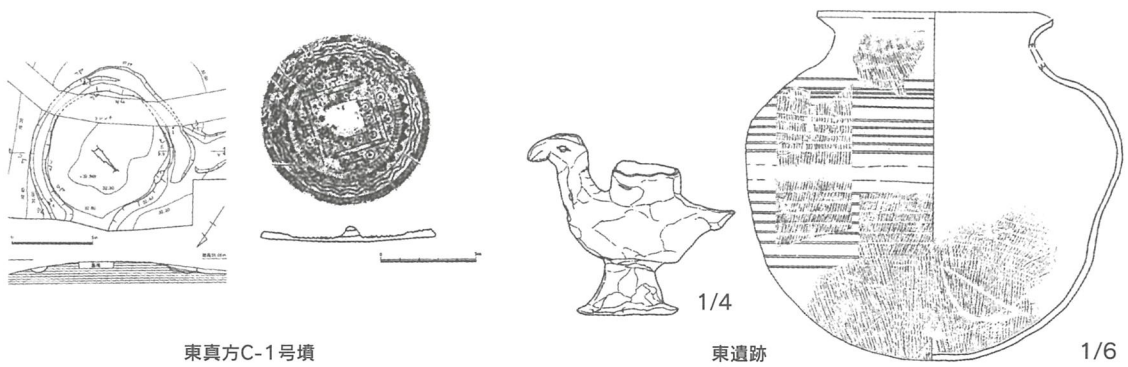
飯原門口遺跡周辺



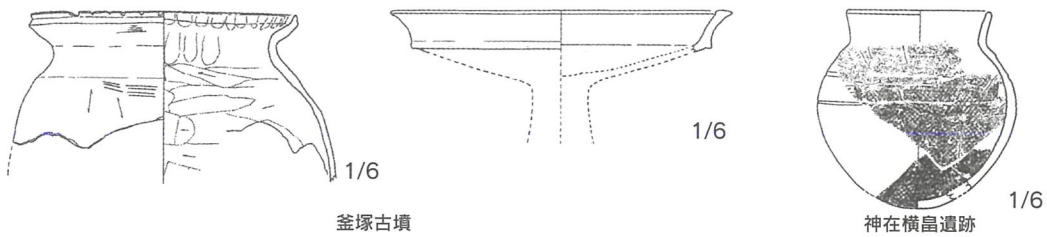
本遺跡周辺



東遺跡周辺



神在横畠遺跡周辺



第20図 長野川流域における地区ごとの特徴的遺物

続く周溝の形状から前方部の存在が想定されたことから、現在では小形の前方後円墳と認識している。後円部の箱式石棺内に方格T字鏡が副葬されていた。前期後半の古墳とされる。

東五反田遺跡の方形周溝墓や箱式石棺墓との関係については、東五反田遺跡の方形周溝墓→同遺跡箱式石棺墓→真方C-1号墳の築造順位となる。

V 長野川流域における弥生 ～古墳時代の地域構造(素描)

東地区および周辺の弥生～古墳時代前半期の集落、墳墓の調査概況を紹介してきたが、最後に長野川流域における弥生時代から古墳時代にかけての地域の様相を概観しておこう。

長野川流域では、東遺跡群の南に本遺跡群が、さらに上流域に飯原門口遺跡が立地している。各遺跡は2kmほどの間隔をおいて立地しており、いずれも弥生中期から古墳前半期にかけて共存していることから、長野川水系の当該期の社会は、この3集落を中心に展開したものと考えられる。

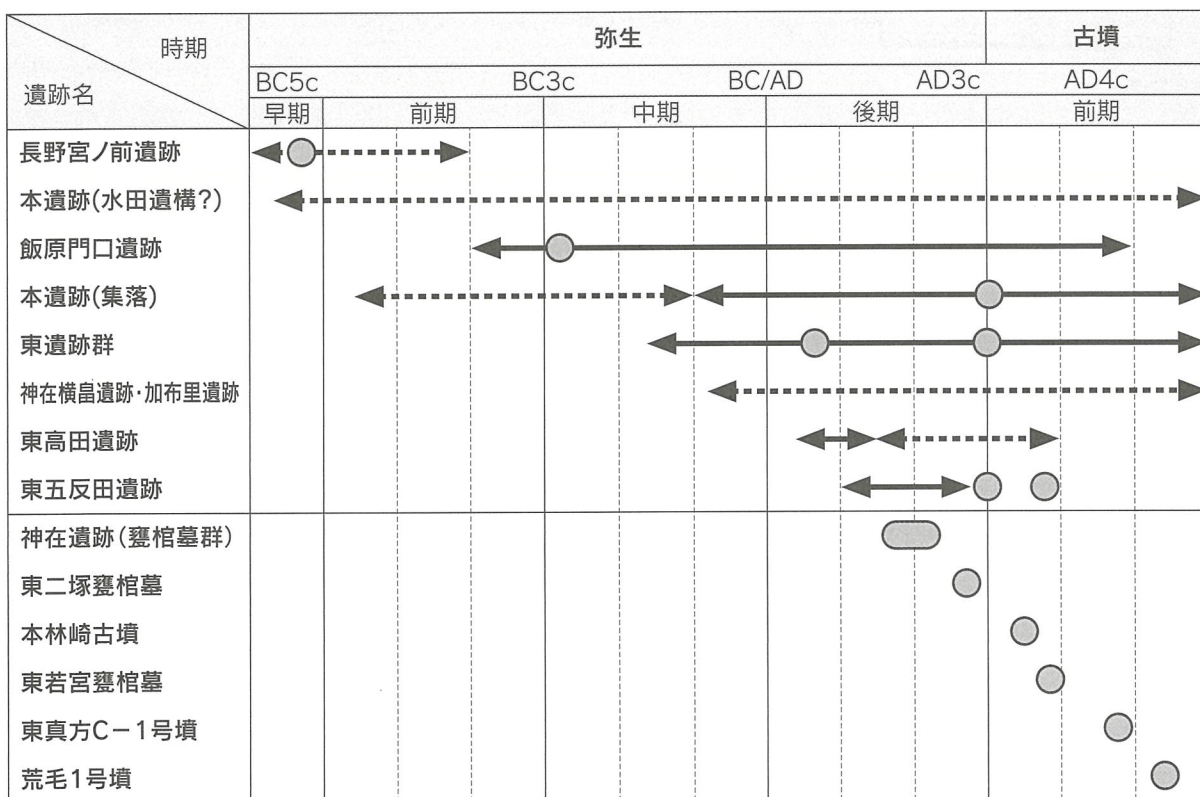
支石墓を含む弥生早期の墳墓が発見された長野宮ノ前遺跡は、飯原門口遺跡の一角に位置し、

さらに金海式甕棺墓群も出土していることから当地の弥生文化の定着はこの地を起点に展開されたものと考えられる。

その後、弥生中期になると本遺跡群が、さらに少し遅れて中期後半から後期初頭頃に東遺跡における集落経営が本格化した。

東地区の弥生～古墳時代の集落を比較すると、東高田遺跡、東五反田遺跡は規模が小さく、存続期間も弥生時代後期に限られる。これに対し、東遺跡では弥生中期後半～古墳中期前半まで継続して集落が営まれている。また、東高田遺跡、東スズ町遺跡で検出した溝状遺構が道路の一部とすれば、東高田遺跡から東遺跡に向かって直線的に延びていることになり、両遺跡が道路を介して深くつながっていたことを推定させる。

また、東遺跡で出土した陶質土器や水鳥形土製品から、この集落が玄界灘を介して韓半島との対外交易にも深く関わっていたことがうかがえ、経済的にも周辺他集落よりも優位になっていたものとみられる。これらの状況から当該地域の集落群の中にあつて東遺跡はその中心的な集落であつた可能性が高いと判断される。対外交渉の直接の舞台となったのが、長野川河口に位置する神在横畠



第21図 長野川流域の弥生～古墳時代前期における主要遺跡、古墳の消長

遺跡や加布里遺跡だったのではなかろうか。

伊都国域における大陸・朝鮮半島との対外交渉が本格化した弥生後期以後になると、長野川水系における主導権は下流の東、本遺跡に移ったものとみられ、特に本遺跡がその中心的な位置をしめたものと考えられる。集落において韓半島系の漆器や青銅製鋤先が出土する状況から、周辺の他の集落よりも地位的に優位であったことがうかがわれ、長野川流域最古の前方後円墳である本林崎古墳が本遺跡群の東岸に位置することも、本遺跡群の優位性を裏付ける。

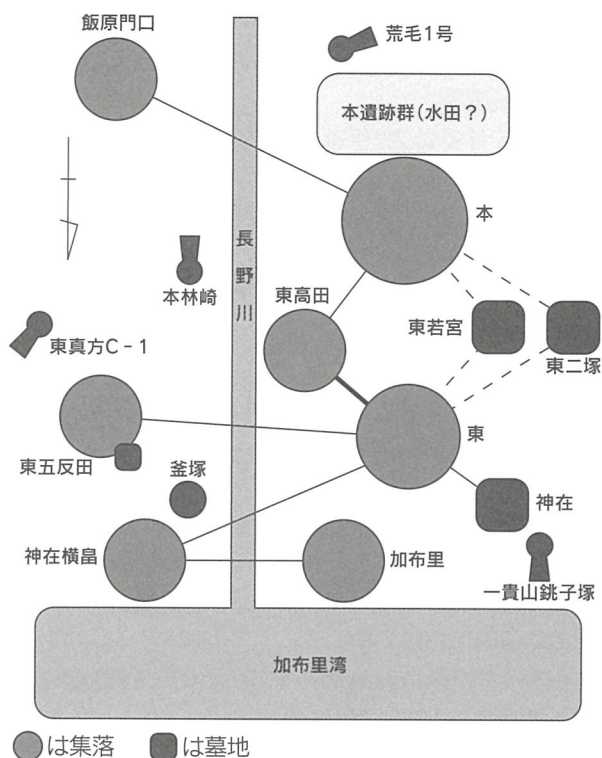
VI おわりに

長野川は糸島地方西部の主要河川であり、二千年以上の長きにわたり、流域の農業経営を支えてきた。現在では長野川流域にとどまらず、西の深江平野の農業水利としても整備され、貴重な水源となっている。深江平野において長野川の水がいつごろから利用されるようになったのか、当地の歴史を考える上で興味深い課題でもある。

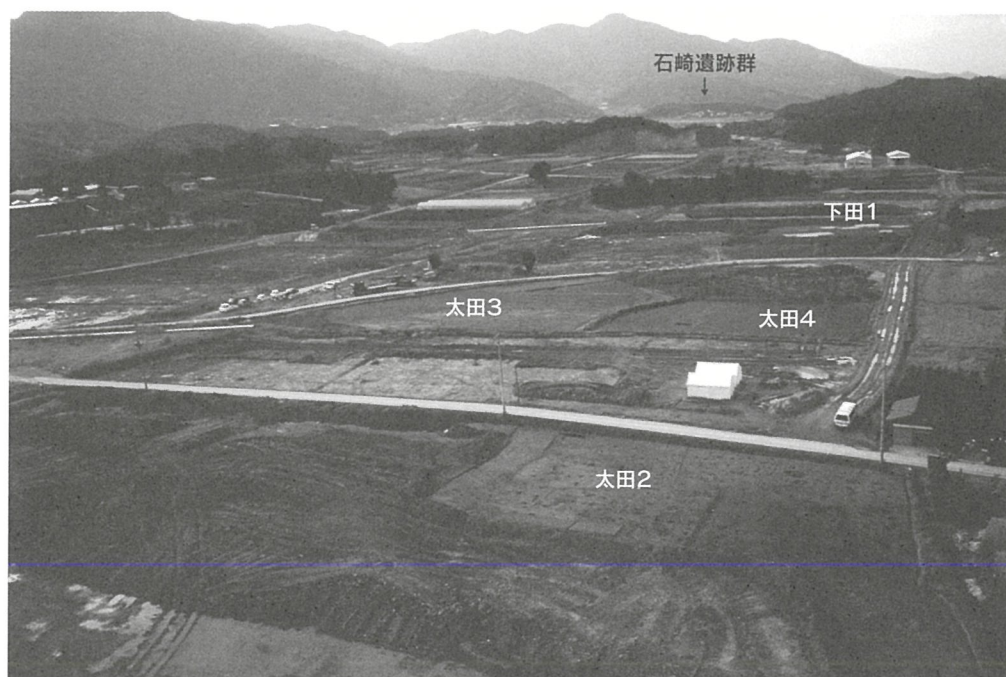
さて、一帯には、一貴山銚子塚や釜塚古墳など当地を代表する古墳が築造され、糸島地方の歴史を考える上で重要な地域であることは疑いない。

なかでも、東地区の遺跡群はこれら重要な古墳にも近く、これらの築造に浅からず関わってきたはずである。この地区の遺跡の調査成果の報告は当

地の歴史解明には欠くことはできないものである。現在、博物館が管理する資料はまだ少ないが、これらの解明を進めるためにも、今後、資料の整理にも取り組んでいきたい。



第22図 長野川流域における弥生～古墳時代前半期の地域構造



第23図 東遺跡太田地区上空から石崎遺跡群をのぞむ(昭和61年1月撮影)

[参考文献]

東遺跡群

宮井善朗「北部九州の漢鏡－後期の様相を中心に－」『倭人と鏡－日本出土中国鏡の諸問題－』第35回埋蔵文化財研究集会発表要旨1994年
橋口達也『東太田遺跡』今宿バイパス関係文化財調査報告書第 集 福岡県教育委員会 1984年
東五反田遺跡
前原市教育委員会『伊都－古代の糸島－』1992年
東高田遺跡
岡部裕俊『長野川流域の遺跡群Ⅱ』前原町文化財調査報告書第33集 1990年
角浩行・林覚『本田孝田遺跡・東スス町遺跡』前原町文化財調査報告書第49集 1993年
東二塚遺跡
原田大六「日本最古のガラス」『糸高文林』第2号 1953年 福岡県立糸島高校
原田大六「日本古墳文化」筑摩書房
梅原末治「日本上古の玻璃」『史林』第43巻第1号 1960年
山崎一雄「日本出土のガラスの化学的研究」『古文化財の科学』1987年
藤田等「その他の装飾品 1 釧 ガラス釧」『弥生時代ガラスの研究』1994年
東若宮遺跡
野田純子『神在横畠遺跡』前原市文化財調査報告書第71集 2000年

本遺跡群

角浩行 林覚『本田孝田遺跡・東スス町遺跡』前原町文化財調査報告書第49集 1993年
岡部裕俊「ガラス玉副葬の小形甕棺墓」『伊都国歴史博物館紀要第3号』2008年
神在遺跡
大神邦博『福岡県糸島地方の弥生後期甕棺墓』「古代学研究第53号」1968年
橋口達也『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書13』福岡県教育委員会1978年
神在横畠遺跡
野田純子『神在横畠遺跡』前原市文化財調査報告書第71集 1998年
岡部裕俊『史跡釜塚古墳』前原市文化財調査報告書第81集 2003年
本林崎古墳
岡部裕俊『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第35集 1991年
真方C－1号墳
角浩行『今宿バイパス関係文化財調査報告書』前原町文化財調査報告書第47集 1993年

糸島市立 伊都国歴史博物館紀要

第5号

発行日 平成22年3月31日

発 行 糸島市立伊都国歴史博物館
〒819-1582
福岡県糸島市井原916番地

印 刷 株式会社ディスジャパン
〒810-0041
福岡市中央区大名1-9-30 福岡観光ビル3階
TEL 092-712-0431